

# 中学3年3組 国語科学習指導案

指導者 籠橋 剛

表現や仕掛けに注目して文章を読み取り、それをもとに結末部分の主人公の運命について検討したことは、文学的文章を批評的・分析的にとらえ、個々の読みを広げ深めることに有効であったか。

## 1 単元名 ウミガメと少年 ～表現や仕掛けに注目し、話の核心にせまろう～

### 2 授業の構想

(1) 中学3年生に進級した本学級の生徒は、落ち着いた態度で日々の国語の学習に取り組んでいる。学級全体の前で自分の考えや思いを進んで積極的に述べるとなるとやや限られてしまう傾向があるが、小集団での話し合いの場では、大半の生徒が自分なりに考えを表現することができる。また、音読やスピーチでも、大きな声を出して取り組める生徒が多く、学習姿勢はおおむね前向きであるにとらえている。

現代文の文学的文章については、2年生の後期に菊池寛の「形」や太宰治の「走れメロス」といった作品を学習してきた。その中で、「形」においては他の短編小説との比較から、文章構成や表現上の仕掛けの工夫の効果とそれらの工夫に込められた作者の意図に注目し、作品の持つ魅力について批評文を書くという活動に取り組んだ。以下は、「形」の魅力について生徒が書いた批評文の抜粋である。

- ①新兵衛の口から「形」という言葉がひょいと出てきて、こちらは題名の意味を知り、「ああ、こんな感じの話なのかな」とだいたい話の筋が見えてきた気分になる。ところが、一番最後になってそれが一気にくつがえされる。世界が逆さまになったような感じだ。新兵衛もまさにそんな気分だったのではないだろうか。そして、読者が「え？」と驚いている内に物語は急速に終わっている。読み終わり、再び最初のページに戻り改めて考えてみる。結局、この「形」とは何のことだったのだろうか。
- ②新兵衛は最後死んでしまうが、この話はよくある「高慢な嫌な奴が最後に報いを受ける話」ではない。新兵衛に悪かった点があるなら、それは「形」に対する自分と周りの見方にずれがあることに気づいていなかったことだ。この事は作品の主題と深く関わっている。この作品は「形」つまり「外観、外見が他人に及ぼす影響の強さ」を主題にしているのではないか。実際、身の回りには「形」が先走りして、内面、内容的な部分あまりみられていないことが少なくない。この作品にはそれがおろかなこととは書かれていない。でも、新兵衛は死んでしまうのだ。
- ③わざわざ短い文にして読者を引きつけようとするのは、この最後のシーンに何かしらの意味があると思われる。これを書いている最中何度も作品を読み返した。一番最初に読んだときは何のことだかさっぱりわからなかった「形」が、今何となくぼんやりと浮かび上がってくるような気がしているところである。

①では、題名の付け方と劇的な文章構成を関連づけ、自分なりに作品の魅力について考察している。また、②では、人物設定の仕方や読者の考えに委ねる表現の巧みに作者の意図を感じ取り、主題にせまろうとしている。いずれの文も、文章構成や表現上の仕掛けの工夫に注目し、作品を批評的に読み取ることにはある程度成功していると言える。ただ、③については、結末部分の一文の短さに注目しているものの、文章の読み取りが不十分で、まさに「ぼんやり」としか作品をとらえきれていない。

学年とともに学習材である文章の難度も上がってくる中、中学3年生という段階を考えると、文学的文章を読み味わう際には、登場人物の心情のみならず、文章そのものの構成や舞台設定、さまざまな表現の工夫などにも意識を向け、工夫の背景にある作者の目的や意図についても考えを巡らせるなど、いろいろな角度から批評的な読みを展開できることが望まれる。そのためにも、互いの読みを授業の中で交流させ、読み取りの上でのつまづきを修正していくとともに、自分一人では気づかなかった新しい視点から文章を読み直すことを可能にし、個々の読みに広がりや深まりを持たせたいと考えている。

(2) 本学校の国語科では、思考力・判断力を中核として、読みの力・表現力を総合的に高めていくこ

とを目指している。そして、中等部（小6～中3）の各領域における思考力・判断力・表現力を、相手や目的に応じて批評しながら聞くこと、構成や表現を工夫して書くこと、表現の効果や構成などに注目しながら共感的・批評的に読むことであると設定し、これらを通して自分の考えを深めていくこととしている。したがって、文章表現の工夫に注目し、客観的な視点から批評的に作品を読み解いていくことは、思考力・判断力・表現力を高めていく上で重要な要素であると言える。

野坂昭如作「ウミガメと少年」は、太平洋戦争末期の沖縄戦を背景に、沖縄の砂浜で産卵という営みを行うウミガメと、沖縄戦に巻き込まれた一人の少年の運命が対比的に描かれた短編小説である。戦争を扱った文学作品は、戦争体験が風化しつつある現代における平和学習の素材として意義深い反面、戦争から60余年が過ぎた現在の日本においては、状況や登場人物の心情についての生徒の実感が乏しく、表面的な読み取りにとどまりやすい傾向もまみられる。ただ、本校の3年生は4月に沖縄への修学旅行を経験しており、その中で沖縄戦体験者の講話や平和祈念資料館、防空壕（ガマ）の見学などの体験を伴った平和学習を行い、伊江島でのホームステイでは沖縄に暮らす人々の温かさにも実際に触れてきている。そのため、物語の状況や心情把握の際のギャップは比較的少ないと考えられる。

よって、学習指導要領の項目「表現の仕方や文章の特徴に注意して読むこと」（読むことのウ）をふまえ、次の2点を読みを深めるための視点として設定した。

#### ①少年とウミガメの目で戦争を二重にとらえている意味

ウミガメと少年は、沖縄という同じ場にながら、戦争のとらえ方で明確に区別されている。戦争の事象は見えているものの文章上は比喩的なとらえに終始し、戦争としての認識がないウミガメに対して、少年は戦争だと明確に認識していることが、戦争に関わる多数の用語の存在から読み取れる。また、主人公である少年はウミガメとの関わりにおいては「少年」と記述される一方、戦争との関わりの中では「哲夫」という固有名詞で記述される。こうした二重のとらえ方の存在に注目し、その意味について考えることで批評的な読みの姿勢が養われるとともに、文章に根拠を求めた確かな読みが形成されていくと考える。

#### ②結末の少年の運命から読み取れるもの

少年がウミガメの卵を食べ、その後海に滑り込んでいくという場面は、少年の生死を想像させる表現であると同時に、少年がウミガメとして転生したように読むこともできる。そして、結末に再登場する大きなウミガメと小さなウミガメにより、少年の転生は象徴的に強調され、大海原へ泳いでいく様からは戦後世代が世界へ生のかたまりを移していく希望や厳しい生存競争への直面など、暗示的な読みがさまざまに広げられる。こうしたさまざまな読みについて検討しあっていくことで、批評的な読みがより鮮明になり、個々の読みにいっそうの深まりがもたらされると考える。

以上より、この小説を単なる平和学習の素材として扱うのではなく、ファンタジー性を重視した文学作品としての側面を重視し、今まで学習してきた文学的文章の読み方を生かして、対比などの仕掛けや象徴的、暗示的表現などに注目しながら、客観的視点からより批評的に読み取っていくことをねらいとして、本単元を構成することとした。

(3) 第1次では全文を通読し、初発の感想をまとめる活動が中心となる。しかし、ほとんどの場合、初発の感想はまっさらな状態で文章を読んだ、その率直な感想に終始し、以降も学習の動機付けという限定的な役割にとどまることが多く、学習の後半に顧みられることは少なかったように思う。そこで、本単元においては、導入においてこれまでの学習を想起させ、批評的な視点から読むという前提に立って初発の感想をまとめさせる。そして、単元の終末に、改めて初発の感想に立ち返ることで、自分の読みが確実に広がり深まっていることを確かめることで、単純に文章を読み取ったというだけでなく、読みという数値で図りにくい力の向上を個々が実感し、自信と次の読みへの意欲を養いたいと考えている。

第2次では、実際に読みを広げ深めていく。視点①については、文章に根拠を求めた確かな読みを形成していくことが求められるため、この段階ではペアや小グループでの話し合いを重視し、教師が必要に応じて整理、確認していく。よって、文章上の根拠を求める問い返しや、共通点や相違点を明らかにするような提示などといったはたらきかけを大切に、個の思いや考えを他がスムーズに理解しながら

学習が進行するようにしていきたい。

視点②について考え、話の核心にせまる本時は、単元を中心となる学習である。ここでは、通常の座席とは異なる少人数のグループ、具体的には、前時の最後に本時の課題についての個々の考えをまとめさせ、あらかじめ教師が目を通した上で、異なる意見が活発に交換され、新しい視点からの読みが掘り起こされるようなグループを編成する。そして、各グループで話し合った結果をホワイトボードに記入、掲示させ、それをもとにさらに学級全体で検討していく。その際、本文の記述を根拠とし、可能な限り複数の記述を根拠としていくことで、読み取りに説得力を持たせるとともに、作品の読みについての共通の認識が学び合いの過程を通して学級に形成されるようにしていきたい。また、相手の意見を否定的にとらえず、互いに尊重しあうよう促すことで、話し合いを活性化させるとともに、自分の読み固执せず柔軟に読みを変化させていく姿勢を意識させたい。逆に、自分の読みへのこだわりが強い生徒に対しては、なぜそう思うのかを問い返していくことで、自分の読みの根拠を自覚させ、周囲の理解にもつなげていきたい。

第3次では、単元のまとめとして、この作品についての批評文を書く活動を設定する。客観的な説得力が求められるため、易しい課題ではないが、2年生の時の経験に加え、単元のはじめに見通しを持たせておくことや、書き方のモデル（書き出しのパターン、構成例、引用のしかた、文体等）を支援の手立てとして準備しておくことで、生徒がスムーズに取り組めるようにしたい。終末では、前述したように初発の感想をフィードバックすることで、自分の読みの成長を実感させたい。

### 3 展開計画（全6時間 本時4／6）

次	主な学習	時	具体的な学習内容（◇印は、学級全体の学び合いの場面）
1	「ウミガメと少年」を読み、学習の見通しを持つ。	1	<ul style="list-style-type: none"> <li>・沖縄修学旅行で印象に残った体験を思い返す。</li> <li>・学習の目標を知り、今後の学習への見通しを持つ。</li> <li>・「ウミガメと少年」を通読し、初発の感想を書く。</li> </ul>
2	表現や仕掛けに注目し、「ウミガメと少年」の内容について読み深める。	2,3  ④	<ul style="list-style-type: none"> <li>・注目すべき表現や仕掛けについて確認しあう。</li> <li>・戦争について、ウミガメと少年のとらえ方の違いを、文章構成や比喩、対比の巧みに注目しながら比較し、整理する。</li> <li>・主人公の呼称の使い分け（「少年」と「哲夫」）について確認する。</li> </ul> ◇結末で少年はどうなったのかを話し合い、読みを広げ深める。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・個々の考えをもとに、グループで話し合う。</li> <li>・グループでの話し合いの結果を学級全体で検討する。</li> </ul>
3	読みの広がり、深まりを確認する。	5,6	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習過程を踏まえ、「ウミガメと少年」についての批評文を書く。</li> <li>・初発の感想を再読し、自己の読みの変化について整理する。</li> </ul>

### 4 「学び合い」による思考力・判断力・表現力の評価

次	時	学習活動	学習活動における具体的な評価規準	評価資料	評価基準		
					A	B	C
2	4	結末で少年はどうなったのかを話し合い、読みを広げ深める。	文章表現をふまえ、他者の読みも取り入れながら、少年の運命についての読みを深めている。	発言 ノートの記述	文章を根拠にして少年の運命を説得力ある形で読み取り、学び合いの中で自分の考えを述べつつさらに読みを深めている。	文章を根拠にして少年の運命について自分なりの考えを持ち、学び合いを通してその読みを深めている。	少年の運命についてのとらえ方が不十分で、学び合いの中でも自分の読みを深めていくことができない。

### 5 本時の学習

(1) ねらい

「ウミガメと少年」の結末部分の「少年」の運命について、互いの考えをもとに話し合ったことを通して、個々の読みを広げ深めることができたか。

(2) 展 開

学習場面と子どもの取り組み	教師の支援と願い・評価
1. 本時の学習の見通しを持つ。	・事前に編成したグループで座るよう、あらかじめ座席を指定しておく。
<p>「潮に滑り入り、底へ沈んでいった」少年はどうなったのだろう。</p>	
2. グループごとに少年の運命について話し合い、結果をホワイトボードに記入し、掲示する。 ・少年は海の底へ沈んでいったのだから、死んでしまったと考えるのが自然だ。 ・「潮に滑り入り」とあるから、少年は自ら命を絶ったのだと思う。 ・「あったかい、海の水が甘い」と感じているから意識がある。死んではない。  3. 掲示された結果をもとに全体で話し合う。 ・六月の暑さの中、家族と離れ日に日に弱っていった結果、死んだのだと考えられる。 ・海の水の甘さと卵の甘さは同じだから、少年がカメになったことを暗示している。 ・少年は戦争という極限状態で、正常な判断ができなかった。家族と離れ、卵も食べ尽くし、生き続ける気力を失ったと思う。 ・小さいウミガメは、少年が食べなかった卵から生まれたとも、少年がカメに生まれ変わったとも読むことができる。  4. 本時のふりかえりをする。 ・戦争に関係なく生き続けるウミガメに少年が生まれ変わることで、戦争は人間だけが起こす愚かなことだと作者は訴えているのだと思った。 ・ただ単純に少年は死んだと考えていたけれど、みんなの意見を聞いて、一つの文章からいろいろな読み方ができるんだということがよくわかった。	・話し合いがスムーズに進行できるよう、グループごとの司会と書記を事前に決めておく。 ・前時にまとめた考えを順番に発表した後、話し合いに移るよう指示する。 ・考えを述べる際、文章の記述を根拠とするよう促す。同じような表現との関連から、複数の根拠が挙げられないかも考えさせる。 ・違う意見を否定的にとらえず、互いに尊重しながら読みを深めていくよう促す。  ◎掲示された結果を比較、整理し、作品の読みについての共通の認識を形成していけるよう、必要に応じて問い返していく。 ◎疑問点については掘り下げ、読みの根拠を明らかにしていく。 ◎相違点については互いの読みの根拠を述べさせることで考えを揺さぶるようにする。 ・少年が卵を食べたこと、「哲夫」から「少年」への変化、小さなウミガメが広い海の中に見えなくなっていくことなど、関連する部分の意味についても考えさせ、読みを広げていく。  ・ノートに現在の自分の考えと本時の感想をまとめるよう指示する。
<p>評価の観点（読む能力） 文章表現をふまえ、他者の読みも取り入れながら、少年の運命についての読みを深めている。 【評価方法 発表・ノート】</p>	